言語接触から見た日本語・朝鮮語
—主として併合時代以後を中心に—

門脇誠一

1．はじめに

本論は、言語接触という観点から主に日朝併合時代以後、日本語と朝鮮語が互いにいかなる影響を与えあってきたか、さらに、それによってどのような変化が起こったか等について、これまでとは違った角度から考察して見るものである。

これまで両言語間の言語接触による影響について考察する際、主として、漢字語を含む自立語（主に名詞）の借用が中心になり、接辞などの文法的な機能を有する要素の借用についてはあまり積極的に扱われていたとはいえない。

言語接触という現象は、広く見れば文化接触の中に含まれるが、その接触は、今更言うまでもないことだが、直接・間接を問わず人間を介したものだといえよう。そして、重要なことは、言語接触を通して単に新しい語彙が追加されたといったことだけでなく、接触の強度によっては、文法体系内部にまで大きな影響を及ぼすことがあるということである。

本論では、特に語彙以外の側面に焦点を当てて、これまで発表してきたものを土台にして考察し直してみたい。

2．議論に入る前に、まずは具体例として、朝鮮語に取り入れられた日本語と英語の接尾語・接尾辞を取り上げてみよう。

① 日本語の例

以前、日本に「ヨン様」ブームが起こった際、映画やドラマなどの文化が洪水のように流入したが、言語的には、何か象徴的な言葉が日本語に入り込んだかというとどうもそうでもなさそうであった。それどころか、逆に、「ヨン様」という言葉が紹介され、一部の芸能人の間では名前に「様」を付けて言う例がインターネットなどで紹介されたりもした。

ちなみに、日本では、「ヨン様」の「ヨン」が数字の４と発音が同じなので、「様」を四つ並べて「様様様様」と書き「ヨン様」と読ませるのが創作四字成語として選ばれたと言う。

ところで、このような現象が起こるには、「様」という接尾語が主に人間の姓に付いて敬称を表すものだということが一般の人々の間にかなり広く共有されていることが前提となっている必要がある。[1]

さらに、熊谷(1991)でも指摘しているように、解放前には日本語式命名法が導入され、女性名に日本語接尾語「—子」をつけることがかなり広く行われたのである。ただ、「—子」が取り入れられた際、「こ」という日本語読みではなく、「자」という朝鮮字音読みとして入ることになった。[2]この女性名については、字音語の二字全体が一単位として取り入れられたと考えられなくもないが、しかし、註２であげた名前から共通要素である「子」を抽出し、それが多くの日本女性の名前に付けられるものだという意識はかなり広く共有されていたのでないかと思われるのである。

② 英語の例

しばらく前から귀차니즘という語が使われ出した。この語は『표준국어대사전』『연세현대한국어사전』『ﾃﾞｲﾘｰコンサイス韓日・日韓辞典』『小学館韓日辞典』などにも載っているほどの語であるが、위키백과（ｳｲｷﾍﾟﾃﾞｲｱ）によると、「すべてのことが面倒くさくて、怠け心を起こす現象が固定化した状態を表すﾈﾁｽﾞﾝ（network+citizen の混成語）の使用するｲﾝﾀｰﾈｯﾄ用語」だという。

この귀차니즘という語は、귀찮다(面倒くさい)という形容詞の子音語幹귀찮-からㅎを取った形に英語の接尾辞-ism に相当する이즘が結合されてできたものである。また귀차니스트という語も,同じく귀찮다という形容詞の子音語幹귀찮-からㅎを取った形に、英語の接尾辞-ist に相当する이스트がついたものである。これら-ism,-ist という接尾辞が固有語に接尾した形が辞書に載るほど一般化しているということは、明らかにこれらの接辞が「主義」「主義者」を表す形式だということが一般の人々の間で幅広く共有されていることが前提となっているわけである。

一方で、게으르니즘という語も使われているようだが、[3]この形は言語学的にみて問題があると思われるので少し説明を加えておこう。

---

[1] 相手役の女優 최 지우に対して「様」を十個並べて「ｼﾞｭｳ様」という言葉ができたかといえば、そういう話は聞かない。日本のファンのご婦人たちにとっては女優のほうにはあまり関心がなかったのかもしれない。

[2] 国民的歌手として有名な이미자（李美子）氏（1941 年生）をその一例としてあげることができる。ちなみに、「ー子」のついた名前には他に「富子、貞子、寛子、淑子」などがあった。

[3] この語は『표준』にしか載っていないようだ。

この語は게으르다（怠ける）という形容詞の母音語幹게으르-に니즘が接辞しているように見える。この 니즘という形は이즘の異形態のようにも見えるが、母音で終わる語に이즘が結合するものがないかと言えば、用言ではないが다다이즘(ﾀﾞﾀﾞｲｽﾞﾑ)という例がある。また、nude, nudism, nudist という語が入ると、それぞれ누드,누디즘,누디스트と表記される。一般に、/t//d/で終わる外来語が入ると、트,드のように으をつけて取り入れられるのが普通である。この으と이が結合すると原則として으が脱落するので、누디즘,누디스트という形になるのである。art「芸術」を意味する아트という語が아티스트になるのも同様である。前述の게으르니즘という形もそのルールに従えば、게으리즘となるはずのものである。しかし、そうなっていないのは、一つには、固有語であることから、語幹をそのまま保持しようとする力が働いたこと、さらには、귀차니즘,귀차니스트の形が、語幹末の子音/n/が次の音節の初声字として表記されたため、あたかも니즘,니스트が接尾辞と誤って考えられたことの二つの要因が同時に作用したためではないかと思われる。[4]

いずれにしても、言語接触の際に、名詞などの自立した語だけではなく接辞のようなものまでも受け入れられることがあることがわかるが、このような現象はいかなる条件のもとで起こるのであろうか。つまり、言語接触の期間、言語接触の強度などの要因とどのような相関関係があるのかということが問題となるのである。

3．先行研究

本論に入る前に、特に日本語との言語接触により、日本語から借用されたと考えられているものに関して、直接・間接的に触れた論文をいくつかとりあげて検討してみることにしよう。

(1) 李基文(1979)『国語史概説』p232 に、副詞、接続詞が日本語から借用されたと記述されている。

「統語論においても外国語の影響」があり、「日本語の直接的影響」として、「より、のみならず」があげられ、以下のような説明がある。

近代語で生じた後置詞보다（<보다가）「より」が副詞のように使用され (例 보다 偉大하다「より偉大だ」)、뿐「だけ」がやはり独立して使用されるようになった。(例뿐만 아니라「のみならず」) [5]

---

[4]『표준』では、게으르니즘(←게으르 ism)というように説明されているが、なぜㄴが挿入されたかの説明がない。

[5]『훈민정음 국어사전』の　보다の項には「일본어 より　의 번역 투」（日本語「より」の翻訳語）とある。一方、뿐については日本語の影響についての説明はない。

この論文は、日本語から取り入れたものの中に、名詞などの実質語だけではなく、副詞・接続詞のような要素まで入っていることを指摘したもので注目に値するものである。

(2) 李基文(1980) 「19 世紀末葉의 国語에 対하여」では、「19 世紀末の 10 年間に語彙の急激な変化」があったとし、「この変化は甲午年に刊行されたアンダーウッドの字典とその後に刊行された兪吉濬の『西遊見聞』と「独立新聞」を比べてみれば明白だ」と述べている。そして、そのすぐ後に続けて、「一部の開化派の知識層は従来中国を通して入ってきた新知識だけでなく、日本から入ってきた新知識にもどっぷり浸かっていた。」と述べているのが印象的だ。そして、アンダーウッドの字典と『独立新聞』の間に現われる大きな変化は甲午更張と関係があると思われ、『西遊見聞』の刊行もその変化を促進したものだと述べており、しかも、この『西遊見聞』の用語はほとんどが日本語のものをそのまま取り入れたものであったとも述べている。

この『西遊見聞』は『兪吉濬全書』の第 I 巻として納められているが、その刊行辞に李熙昇氏が、「西遊見聞は朝鮮最初の国漢文混用体の文章で記述した」ものであると書かれている。また、第 II 巻は、文法・教育篇となっており、その中には「韓国近代国語文法の嚆矢」とも言われる『大韓文典』が納められている。

(3)李漢燮(1998) 「朴泳孝の建白書に現れる日本漢語について」によると、朴泳孝は「福澤の開化思想に感化を受け」、「文明開化の方向や方法を示す」ことを目的に 1881 年に亡命先であった日本に於いて、「建白書」を作成し、国王に献上したという。

その建白書は、「原文に近い形で漢文訳したもの」であるが、「福澤諭吉の文章のみを引用したのではなく、福澤の用語や当時日本で使われていた新語（主に漢語）を数多く取り入れてい」たようである。

なお、この建白書に使用された日本漢語は 50 前後というが、その中には「権利」を意味する福澤の造語した「通義」という語がそのまま使用されているというのも興味深い。

ちなみに、朴泳孝を初めとする知識人たちは日本に滞在する間、当時日本で出版された書籍を数多く読んでいたとも言われている。

(4)李漢燮(1986) 「韓国語に入った日本語」では、借用時期を 3 つに分けている。

第Ⅰ期：1876 年～1910 年、第Ⅱ期：1910 年～1945 年、　第Ⅲ期：1945 年～現代

さらに、借用の内容が異なるだろうということで第Ⅰ期と第Ⅲ期を自立的借用、第Ⅱ期を他律的借用の時期としている。

第Ⅰ期：『西遊見聞』は福沢諭吉の『西洋事情』から翻訳した部分も多く含まれており、その中には日本語から入った漢字語が 290 語も出ている。しかし、同書に和語は見当たらないという調査結果が載っている。

ところで、興味深い資料として柿原治郎編『日韓いろは辞典』があげられている。そこには、日本語の発音通りに入った語と字音読みで入った語とが紹介されている。この辞書については後に触れたい。

第Ⅱ期：「この時期が一番多く日本語が入った時期である」が、「本格的に入るようになったのは 1920 年以後であり、1930 年頃から急増して、1937 年から 1945 年の間に一番多く入ったように思われる」と述べている。その日本語の中には、「ぴんとこない・ものになる」などの句までが含まれているという。

第Ⅲ期：「この時期は、両言語が直接接触しなくなった時期である」が、第Ⅱ期までに入っていた日本語が大分使われなくなり、また廃語にならなかった和語が多く韓国語に定着した時期で」あったという。

そのことに関して、李漢燮 (1984)で次のように述べている。「一方、廃語化から免れた語は、一部の語を除いてほとんどが韓国語として完全に定着したように思われる。現在一般の韓国人は、これらの語がもともと日本から入った語であるということをあまり意識していない。」

ところで、ここで解放後比較的早い時期に始まり現在でも続いている「国語醇化運動」について触れておかなければならないだろう。

李漢燮氏によれば、文教部から出された、同運動の推進資料『우리말 도로찾기』の序文に、日本語追放のための４つの方法が書かれているという。詳しい内容については、同論文にゆずるとして、徹底して醇化運動を行ったにも拘わらず、借用した日本語をすべて追放することができなかったことは注目すべきことだと思われる。その追放されなかった日本語の多くは、日本語そのままの形ではなく、字音読みを通して取り入れられたものだという。つまり、日本語だということがすぐわかる「たまねぎ・わりばし」などの単語であれば、比較的早い段階で固有の単語に置き換えが可能であったろうが、「葉書・手続・追越」などの単語は「ようしょ・しゅぞく・ついえつ」といったいわば疑

似漢語（字音語）として入り込んだために、純粋の日本語として識別することが難しくなったからだと言えよう。

ここで紹介されているものは、第Ⅱ期においては、名詞以外のもの、つまり、動詞、副詞・形容詞、さらには俗語（句も含む）なども含まれているが、全体から見て、ほぼ自立的な要素に限られていることがわかる。

さらに、三つの時期に共通していることは、借用の方向がほぼ一方的だということである。

(5)　熊谷明泰(1990)は、国語浄化のための資料集をもとに日本語系原音借用語に焦点を当てて分析した論文であるが、ここでは次の論文だけを紹介することにしたい。

熊谷明泰(1991)「朝鮮語に転移使用された日本語詞—解放前朝鮮語出版物の語彙調査」は、併合時期を通して日本語の影響がいかに強かったかを当時の文学作品・新聞記事・シナリオなどからその証拠を収集しているきわめて貴重な論文である。その中には、隠語・流行語なども紹介されているが、ここでは、それ以外の興味深いいくつかの例を紹介しよう。

① 句として、名詞部分は日本語原音のままで、後接する助詞、及び用言部分が朝鮮語に翻訳されているもの

아시가 나다 足が出る

보로가 나오다 ぼろが出る

가오를 세우다 顔を立てる

시마리가 없다 しまりが無い

② 節全体が日本語原音のままのもの

자마니나루 하지요 邪魔になります

③ 混種語（日本語＋하다）

名詞：하다がついた例はあがっていないが例は少なくないと思われる。

動詞：

사람을 イヂメル한다 人をいじめる

아끼라메 해야지　あきらめなければ

남의 여자 히야까시허러 다니는게 よその女を冷かしてまわること

混種語を作る際は、日本語動詞の終止形＋하다よりは連用形（転成名詞）＋하다のほうが普通だったようだ。

④ 形容詞；

가다이한 것 かたいもの

참 고와이해요 本当にこわいです

퍽 아이마이합니다 とてもあいまいです

나마이끼한 리론을 늘어놓고 있는　なまいきな理論を並べ立てている

⑤ 副詞；

앗사리하게 단념하겠습니다あっさりと断念します

これらの例に対して、「解放前の朝鮮語では、名詞は勿論のこと、動詞・形容詞・形容動詞・副詞等すべての品詞にわたって広く行われていた」という指摘がある。

さらに、両言語の間でピジン語的要素が形成されていたことについても言及している。[6]

ところで、最近ネット上で見つけたのだが、現在日本・韓国の10代に使われている「やばいンデ」「カンジ」（ファッションセスのよいこと）などの、「韓本語（ハンボノ）」と言われる表現が使われているらしい。

⑦　感嘆詞；

기레이 <綺麗>「ビリヤードで、上手く玉を当てた時にい発せられる称賛の意を込めた掛け言葉」という。[7]

⑧　翻訳借用

ここで紹介されているものは、「買い物」という日本語に相当する물건사기という表現である。

また、この論文では紹介されていないが、その他にも囲碁に関する次のような翻訳借用とみられる用語があるので紹介しておこう。マネ碁 흉내바둑 継ぎ잇기　花見劫 꽃놀이패　ぼうし 모자 空き三角 빈삼각　なだれ定石 눈사태정석　切り끊기 とび 뜀 のぞき들여다보기。小目소목　高目고목などは字音読みにしただけのものである。なお、最近では단수（単手）という語に置き換えられているが、1980年当時は日本語の「当たり」という語がごく普通に使われていたのである。

---

[6] 筆者も、留学時代に　日本語の「行ったり来たり」のことを「왔다리 갔다리」と言うのを聞いたことがある。また、日本人学校の子供たちが「腹がへった」というのを、習いたての韓国語を使って、冗談交じりに「腹がへつ섰어요」と言っているという話を聞いたことがある。

[7] 筆者は、やはり留学時代に、時々下宿の学生たちと一緒にビリヤードをしに行ったりしたが、そこでは、「押し・引き・回し」などの日本語が飛び交っていて驚いたことがあるが、下手な者たちがプレイしていたせいか、「기레이!」という感嘆表現は聞いた覚えがないような気がする。

ところで、熊谷(1987)で、日本語と朝鮮語の間の言語接触に関する研究に言及しつつ、「純粋に学問的に考えるならば、植民地時代とその前後の接触は、言語接触という現象を分析するための豊富な材料を提供してくれるもので、その分析を通して借用語研究の一般理論に貢献することができるだろう」と述べているのが注目される。

4．理論的枠組み

門脇(2007)でも触れているが、確認のため次の点に関して再度言及しつつ、議論を進めていきたい。

Ⅰ.言語借用にはどのようなタイプがあるか。
　また、そのタイプは時代によって変化するかどうか。
Ⅱ．借用の条件
Ⅲ.言語接触によって引き起こされる変化にはどのような種類があるか。

Ⅰ.借用のタイプ

Bloomfield(1933)の第２５章・第２６章・第２７章が「借用」を扱っている部分である。それによると、借用には a.「cultural borrowing 文化的借用」 b.「intimate borrowing 親密的借用」c.「dialect borrowing 方言的借用」の３つがあるという。

a.の借用が通常相互的であり、[8] たいてい借用が語彙の面に限られるのに対して、b.の借用は、普通　征服によって起こることが多く、平和的移住によって起こることはまずない。さらに、借用の方向は圧倒的に、上位の言語から下位の言語に向かって一方的に行われる。また、上位言語のモデルは下位言語の文法形式にさえも影響を与えることがあるとも述べている。

c.の方言的借用に関しては、北朝鮮あるいは中国に於ける朝鮮族の言語との間の借用などに対して適用することが可能だと思われるが、本論とは直接関係がないので触れないでおく。なお、日本語との関連については、後に触れることがある。

II.借用の条件

---

[8] 「通常相互的であり」の部分の原文は＜ordinarily mutual＞となっている。相互的というと、二つの言語が互いに同等の立場で借用しあうような印象を受けるが、実は、必ずしもそうではなく、たまたま一方が与えるものを多く有している場合には、他方が一方的に借用することもありうるという。

これについては、F.C.Hockett(1966)の ４７章　The conditions for borrowing（借用の条件）で①PRESTIGE（威信）と②NEED-FILLING-MOTIVE（必要による補充）の二つをあげている。

「威信」に関しては、『言語学大辞典』に載っている説明がわかりやすいのでそれを利用することにしたい。この辞書には「威信方言」の形で載っているが、勿論、この概念は方言間にだけ使用されるわけではなく、言語間にも使用されるものである。

ところで、「威信」に対しては、「水の流れと同様、文化的に高いとみなされている所からより低い所へと伝播するのが原則である。これは主として、より文化的に高いものにあこがれ、その人々と同じになりたいという話し手の心理的態度に基づく、「良い、上品な言葉」に対して、「汚い、田舎くさい言葉」という評価はその現れであ」るという説明がなされている。

この「威信」という概念は、「社会学」では、「人間が、ああなりたい、羨ましい、幅がきくと思って自分の生き方の目標や憧れの対象にするようなもの」という意味で使われることが多いようだが、朴泳孝・兪吉濬を初めとする朝鮮開化派の人々と、それに次いで祖国のための啓蒙活動を夢見て日本にやってきた多くの留学生たちが、明治維新で近代化をなしとげた日本の姿を見た時に感じただろうと思われる憧憬の気持ちにそれを感じ取ることができよう。

III. 言語接触によって引き起こされる言語変化にはどんな種類があるか。

Winford(2003)は借用に関して、散発的な接触による少数の語彙借用からかなり強い接触による大量の語彙借用に至るまで連続したものと捉え、借用の尺度として５つの段階を設けている。この尺度は Thomason and Kaufman(1988)にあがっているものを要約したものであるが、要領よくまとまっているのでここに紹介しておこう。

1. 散発的接触：語彙借用のみ
2. 少し強い接触：若干の文法要素の借用（接続詞などの機能語）
3. やや強い接触：少し文法的な要素の借用（側置詞、派生接辞；人称代名詞、指示代名詞、小さい数詞など）
4. 強い文化的圧力：文法的な要素の緩やかな借用（類型的な変化を引き起こすことの比較的少ない文法要素：屈折接辞、新しい格など）
5. 非常に強い文化的圧力：文法要素の大量の借用（類型的に重大な分裂を引き起こす文法要素の借用：
例えば、SOV 型から SVO 型への変化、膠着型から屈折型への変化など）

そして、この尺度は、尺度の下位にある特徴を有している場合上位にある特徴をも同時に有するものであるとしている。つまり、含意普遍（implicational universal）の関係をなしているというわけである。

なお、ここで言う「接触の強度」というのは、人口比、グループ間の社会政治的関係、接触期間の長さ、グループ間における二言語併用の度合いなどの要素が持つ機能のことをいう。また「文化的圧力」というのは、外来要素の受容を促進する社会的動機づけの機能を指している。

しかし、Winford はこの借用の尺度について、接触・文化的圧力の程度と文法要素の借用の度合いとの間に明確な対応があるのかという問題点を指摘しているが、まだまだ検討すべき点があると思われる。

5．

今、両言語に関し、３．にあげた先行研究で見た結果だけをもとにして、併合時代以降の言語接触による影響について、上述の点を考慮に入れつつ検討してみると、ほぼ次のように言えるのではないかと思われる。

まず、借用のタイプに関して言えば、概略（2）にあげた三つの時期のうち、第 I 期と第 III 期は「文化的借用」第 II 期は「親密的借用」に当たると言えよう。

ここから言えることは、第 II 期（併合時代）から第 III 期（解放後）にかけて、言語借用のタイプが「親密的借用」から「文化的借用」の段階に変わってきたと一応考えられるが、借用の方向はやはり依然として一方向的な傾向にあると言えよう。

それでは、「借用の尺度」から見た言語変化についてはどのように見られるだろうか。

まず、大量の語彙の借用、接続詞など機能語の借用、若干ではあるが接辞の借用、さらに混種語など構造的な影響もあったこと、ただし、類型論的な変化を及ぼすような大きな変化はもたらしていないことなどを考慮すれば、強度はこの枠組みではほぼ３．程度の段階と見ることができよう。

6．本論

それでは次に、これまで言語接触の結果借用したとして取り上げられることのなかった要素について考察することにしよう。以下に、(A)〜(D)の４つの例をあげて検討するが、これらのうち、(A).(B).(D).の３つについては、門脇(2004)で簡単に触れておいたものである。ただ、２ページ内におさめて記述しなければならなかったので説明が十分ではなかった。以下に、具体例をあげつ

つ少し詳しく説明を加えていきたい。その結果、借用の強度が変わるか変わらないかについても検討することにしよう。

(A)数量名詞句における「数詞＋助数詞＋連結辞＋名詞」の型

門脇(1992)は、日本語とその周辺の言語における数詞句構造を比較し、その上で通時的なことについても言及したものである。

その際、朝鮮語の数量名詞句の型に関し、現代語では名詞後行型として Q+N、Q+C+N, Q+C+G+N の三つ型があり、中期朝鮮語では、Q+N、Q+C+N, N＋Q の三つの型が認められるとした。

（但し、Q は数詞、C は類別詞、G は連結辞、N は名詞）

中期朝鮮語では、Q＋N の型が圧倒的に多く、Q＋C+N のように類別詞を介する型は勿論あるが、その類別詞の中には中国語から借用したものが少なくない。しかも、Q＋C+G+N のように連結辞を介したものは見られないのである。この型については、新たに獲得したものかと思われると書いておいた。　現代語においてはこの型は存在するが、この論文を書いた当時、留学生に聞くと翻訳調の感じがすると言われていたものである。

以下に、中期朝鮮語の例として『老乞大巻上下』からのものをあげておこう。

1.『翻訳　老乞大　巻上』
1.b 一箇火伴　　ᄒᆞᆫ 버디 (Q+N)
9b. 一斤麺　　열근 ᄀᆞᆯ (Q+C+N)
9.b 一斤羊肉　ᄒᆞᆫ근 양육 (Q+C+N)
20.b　五箇人　다ᄉᆞᆺ 사ᄅᆞᄆᆡ (Q+N)
27b. 一巻紙　ᄒᆞᆫ권 죠해 (Q+C+N)
47a.　両三箇客人　두세 나그내 (Q+N)
64b. 一盃酒　　ᄒᆞᆫ 잔 수울 (Q+C+N)

2.『翻訳　老乞大　巻下』
7b. 三箇客人　세나그내 (Q+N)
21b. 一群羊　　ᄒᆞᆫ물 양 (Q+C+N)
31a. 一張弓　　ᄒᆞᆫ댱 화ᄅᆞᆷ(Q+C+N)
44a. 一箇手　ᄒᆞᆫ 소날 (Q+N)
46b.一箇父母　ᄒᆞᆫ 부모(Q+N)
52a. 一箇帽子　ᄒᆞᆫ 가디 (Q+N)

ここで興味深いのは、中国語で Q＋C+N の型になっているものでも中期朝鮮語では　Q＋N と数詞が直接名詞を修飾するが少なくないということである。

ちなみに、前間恭作氏の『韓語通』に出ている数量詞に関する記述を見ることにしよう。

3.『韓語通』

p45に次のような記述がある。

一冊の本　한권 책 (Q+C+N)　　二匹の牛　두마리 쇼(Q+C+N) 三疋の木綿 세필 무명(Q+C+N) 船四艘　배 네쳑(N+Q+C)　米二十斗　쌀 스므말(N+Q+C) ふた言三言 두어마대(Q+N)

上の最初の３例はいずれも日本語の「数詞＋類別詞＋連結辞＋名詞」の型に対して朝鮮語のほうは連結辞のない型が対応しているということである。

ところで、その後兪吉濬『西遊見聞』(1895)と金大熙『二十世紀朝鮮論』(1907)にこの型が現れていることがわかった。

4.　兪吉濬『西遊見聞』(1895)

P474　一百二十馬力의　蒸気船

P481　一条의　鉄線

P489　三数十片의　紙

P497　二百余尺의　柱

p501　一条의　馳馬路

P554　数百의　農家

最後の例は類別詞の付いていない数詞だけの例である。

5. 金大熙（1907：明治４０年）『二十世紀朝鮮論』[9]

p15. 一張의 紙

p15. 一片의 紙

p28. 一個의 製造場

p29. 六十八個処의 市街

p30. 六百人의 仏軍

p44. 二人의英国人의 監督

---

[9] 金大熙という人物は、17歳で日本の慶応大学に官費留学生として入学し1896年に普通科を卒業、その次の年の1897年に東京商業学校に入学し1900年に卒業。帰国後光新商業学校に在籍しながら1907年に『二十世紀朝鮮論』を出したという。

このことは、朝鮮語の中に、日本語式の連結辞を介する数量名詞句が新しい型として追加されたことを意味する。注目すべきは、新しい型を構成する要素はもともと朝鮮語内にあったものであるということである。類別詞の中には中国語から借用したものが少なくないことから中国語との言語接触についても考慮しなければならないが、いずれにしても統語的な構造に関する影響を受けたことになるのである。

(B)授受動詞　補助動詞の「～てもらう」の表現

朝鮮語にも日本語同様、授受動詞「やりもらい」の動詞があり、さらにこれらに「～してやる」「～してあげる」などの補助動詞的な用法も存在することはよく知られていることである。しかし、これに対して「～してもらう」「～していただく」という表現ができないため、これを表現するためには主語を取り替えて「～してくれる」という言い方にスイッチしなければならないわけである。つまり、「A は B に英語を教えてもらった（いただいた）」と言いたい場合には「B は A に英語を教えてやった（おやりになった）」式に、言いかえなければならないのである。

これを図式化すれば次のようになろう。

やる	もらう
あげる	いただく
～してやる	＊～してもらう
～してあげる	＊～していただく

つまり、「～してもらう、～していただく」の部分が体系上の「空き間」になっているのである。

当然、その空き間を埋めようとする力が働いてもよさそうだと思うけれども、今のところ、「私は友達に英語を教えてもらった」という文に対する나는 친구한테 영어를 가르쳐 받았다.という言い方は標準的な言い方としては認められていないようである。

しかし、筆者が1980年ごろ、慶尚北道大邱市にある啓明大学校に勤務しているとき、日本語科の学生の中に、「～してもらう」に対応する言い方をする者がいることに驚いたことを覚えているが、その学生の話では、釜山などの慶尚南道の地域で日本人との間で商売をしている人たちの中には、この表現を使う人は少なくないということであった。

ところが、しばらく前からソウルを初めかなり広い地域にわたってこの表現が限られた単語ではあるが、使われているようなのである。

そのことは、『표준』『연세』『훈민』『デイリー』などの辞書に載っていることからもわかるのであるが、その語とは、これまで確認したところでは次の4例である。건네주다/건네받다, 넘겨주다/넘겨받다, 돌려주다/돌려받다, 물려주다/물려받다

1.『표준』の例

① 분명히 그 사람에게 현찰로 이백만 원을 건네주었단 말이에요.
確かにその人に現金で2百万ｳｵﾝを手渡したんですよ。＜手渡してやったんですよ＞
형에게서 책을 건네받았다.
兄から本を手渡された<手渡してもらった＞

② 회사를 후계자에게 넘겨주다　会社を後継者に譲渡する＜譲渡してやる＞
사장에게서 회사의 경영권을 넘겨받았다.社長から会社の経営権を譲渡された＜譲渡してもらった＞

③ 친구에게 빌린 책을 돌려주다　友達に借りた本を返す＜返してやる＞
그는 부모님에게서 유산을 물려받다 彼は両親から遺産を受けつぐ＜譲渡してもらう＞

④ ユ는 그가 고통의 비애를 물려주고 싶지 않았다.　彼は自分が歩んできた苦痛の悲しみを息子にだけは味あわせたくなかった＜受けつがせてやりたくなかった＞
부모님에게서 유산을 물려받다　両親から遺産を受け継ぐ＜譲渡してもらう＞

2.『연세』の例

① 유진이는 걱정이 되는 듯 다가와 손수건을 건네주었다 ユジンは心配そうに近づいてきてハンカチを渡した＜手渡してやった＞
아들은 아버지로부터 손때가 묻은 사진첩을 건네받았다.息子は父親から手垢のついたアルバムを手渡された＜手渡してもらった＞

② 부도 위기에 몰린 아버지는 다른 사람에게 회사를 넘겨줄 수밖에 없었다.
不渡りの危機に追い込まれた父親は他人に会社を譲渡するしかなかった＜譲渡してやるしかなかった＞
동기생이 챙겨 준 자료를 넘겨받은 것은 다음날이었다.同期生が用意してくれた資料を渡されたのは次の日だった＜手渡してもらったのは次の日だった＞

③ 물건을 주웠다면 주인에게 돌려주려는 노력은 해야 한다. 物を拾ったのなら持主に返そうという努力はしなければならない＜持ち主に返してやろうとする努力＞
나는 그녀에게서 빌려준 책을 돌려받았다.私は彼女から貸した本を返してもらった
④ 조상이 물려준 문화재를 보호하는 것은 정부와 국민 공동의 책임이다.
祖先から受け継いだ文化財を保護するのは政府と国民共同の責任だ＜祖先が伝えてくれた＞
그 젊은이는 부모한테서 많은 재산을 물려받았지만, 흥청망청 쓰다 보니 어느새 다 탕진하고 말았다. その若者は両親から多くの財産を受け継いだが、湯水のごとく使っているうちにいつの間にか使い尽くしてしまった＜財産を譲ってもらったが＞

3.『훈민』の例
① 사과를 포크에 찍어 그이에게 건네주었다.リンゴをフォークに刺して彼に渡した＜渡してやった＞
현금 500 만 원을 김 씨로부터 건네받았다.現金５００万ウオンを金さんから受け取った＜渡してもらった＞
② 아파트 입주권을 넘겨주다 アパートの入居権を譲渡する＜譲渡してやった＞
선임자로부터 사무를 넘겨받다 前任者から事務を引き継ぐ＜事務の引継ぎを受ける＞
③책을 다 본 뒤에 주인에게 돌려주다本を読んだ後に持主に返す＜返してやる＞
빌려 준 돈을 돌려받다 貸したお金を返してもらう
④ 아들에게 재산을 물려주다 息子に財産を譲渡する＜譲ってやる＞
아버지의 사업을 물려받다 父の事業を引き継ぐ＜譲ってもらう＞

4.『デイリー』の例
① 우체부가 편지를건네주다（郵便配達人が手紙を渡す）＜郵便配達人が手紙を手渡してくれる＞
편지를 건네받다 （手紙を渡される）＜手紙を渡して渡してもらう＞
② 건물을 남에게 넘겨주다 （建物を他人に譲渡する）＜建物を他人に譲渡してやる＞
전임자에게서 업무를 넘겨받다 （前任者から業務を引き継ぐ）＜前任者から業務を譲り受ける＞

③ 친구한테 빌린 책을 돌려주다（友達に借りた本を返す）＜友達に借りた本を返してやる＞
돌려받다 例文がなく、（返してもらう）という訳がついている。
④ 엄청난 재산을 자식에서 물려주다（莫大な財産を子供に譲り渡す）＜莫大な財産を子供に譲ってやる＞
부모로부터 물려받은 기질（親から受け継いだ気質）＜親から譲ってもらった気質＞

日本語訳に関して、不自然になることは承知の上で、＜＞内には なるべく주다, 받다の意味が反映されるようにした。

ところで、③の訳に対して＜返してやる＞としたが、借りたものを返すのに、「返してやる」「返してあげる」と直訳すると恩着せがましく響き、相手に対して気分を害すことになるので留学生にとっては、特に注意しなければならない点である。

このように見てくると、限られた語ではあるが、主要な辞書に登載されていることからもわかる通り、かなり広く使用されていることが予想され、体系上の「空き間」を埋めようとする力が働いていることがわかるのである。さらに調査を進めてみなければ詳細なことはわからないとしても、「～してもらう」という表現が、釜山などの南の地域から中央語等に拡散した可能性が高いとすれば、これはブルームフィールドの言う「方言的借用」ということになる。

いずれにしても、「空き間」を埋めることによって新しい型を獲得したことになるのである。今後この言い方が上の４例以外の動詞にまで広がるかどうか観察する必要があると思われる。

ちなみに、
①이희승(1976)『국어대사전』、②李基文監修(1989)『동아새국어사전』、③東亜出版社編輯局編(1990)『동아프라임韓英辞典』、④『小学館韓日辞典』を見ると、①には물려주다/받다は登載されているが、건네받다, 넘겨받다, 돌려받다は登載されていないことがわかる。②には、넘겨주다/받다, 물려주다/받다は登載されているが、건네받다,돌려받다 は登載されていない。③では①と同様、물려주다/받다は登載されているが、건네받다, 넘겨받다, 돌려받다は登載されていない。④では、②と同様넘겨주다/받다, 물려주다/받다は登載されているが、건네받다, 돌려받다 は登載されていない。

上にあげた辞書に共通しているのは、물려받다だけすべてに登載されているということである。あるいは、물려받다がきっかけになって他の「～してもらう」の表現が広まったのかもしれない。ただ、①に関しては初版が1961年に出ているようだが、そこにも물려받다が登載されているかどうかは確認できていない。

(C)　「縦書き」「横書き」を表す形式

1.

門脇(2004)では、朝鮮語の縦・横に関する共時的な考察を行い、門脇(2009)では、朝鮮語の縦・横に関する通時的な考察を行った。朝鮮語の「縦」に相当する세로という形に関心を持ったのは、中期朝鮮語に가로に対応する古い形が存在するのに対して세로に対応する古い形が見当たらないということからであった。そこで、いつごろ、どのようにして세로という形が出現したのかを調べることになったわけである。辞書類を初め、明治・大正・昭和の文献を調べると、세로が出現する前には、기리、내리などの形が使われていたことがわかる。中期朝鮮語では、現代語のように「方位」という概念が明確に確立していなかったようなのである。「方位」の概念は、「縦書き」「横書き」を導入することによって「上下・左右・前後」などの「方位」を表すグループの仲間入りを果たすことになったのではないかと思われる。

上に述べたことは、門脇（2009）でもある程度触れたが、その後、新しいことがわかったこともあるので、日本語からの影響ということも含めて再度説明を加えてみたい。[10]

1．1

まず辞書の記述から見ていくことにしよう。

①　『日語類解』

この辞書は、原本『倭語類解』をもとに金沢庄三郎氏が朝鮮語の学習用に編成し直したものである。

横　빗길 횡 오우 よこ요고

斜　빗길 사 시야 ななめ나나메

---

[10]屋名池誠(2003)に「中国語や朝鮮語が横書きを用いるようになったのは、日本語よりはるかに遅く、そもそも横書きを使うようになったこと自体、日本語の影響によるものらしいのである。」さらに、「朝鮮語の場合は、横書き発生当初の事情は、現在のところあまり明らかになっていないものの、日本の植民地支配を通して日本語の影響を受けた結果であるらしい。」と述べている。

「横」は「上下・左右」などの「方位」のカテゴリーには入れられず、下巻の「雑語」のカテゴリーに「斜」と一緒に入れられているのである。

ここでは「横」は「方位」を表す語とは考えられていなかったことがわかるが、一方で、「たて」という語が「布帛」のカテゴリーに「よこ」と一緒に入っていることがわかる。

経 늘 경 게이 たて다데
緯 씨 위 이 よこ요고

日本語の「たて・よこ」自体が、古くは布帛の「たて糸」「よこ糸」を表す語として使われていたものが、「垂直方向」「水平方向」という「方位」を表す語になったのではないかと思われる。一方、朝鮮語の場合は布帛の「たて糸」「よこ糸」を表す語は늘,씨であるが、これらの語は「方位」を表す語にはならなかったと思われる。なお、この辞書には「方位」を表す語としての세로、가로という形はまだ見えない。

② 『児学編』
この辞書の発行は隆熙2年となっていることから、1908 年頃かと思われるが、開題によると、朝鮮王朝純祖4年に作られたものという。純祖の在位期間は『ｳｲｷﾍﾟﾃﾞｲｱ』によると、1800年-1834年となっているから、純祖4年は1804年ということになる。この辞書は 19 世紀末から 20 世紀初の朝鮮語を反映したものではないかと思われる。
この辞書の 53 ページに次のような記述がある。
縦　기리 종 タテ다데　ショウ쇼　length
横　가로 횡 ヨコ욕고 クワウ과 crosswise

③ 『和英語林集成』(1872)　平文編訳
Yoko- 横　across; crosswise; horizontal; sideways
Yoo-noji 横字 a word written crosswise
Tate は「経」の漢字が当てられ、「たて糸」の意味があげられている
なお　tate－jima に対しては、「堅縞」という漢字が当てられ、縦という漢字は出てこない。

④ 『漢英対照；いろは辞典』(1888)

よこもじ　横文字　洋文、横文、欧文（西洋文字）roman letters

「たて」に対してはlengthという訳が与えられていることから、長さの意味を表していたと思われる。

これは②も同様である。

⑤『日韓いろは辞典』(1907)

この辞書は、柿原治郎という人によって編纂されたものである。校閲者として韓国昌原府通訳官補という肩書の朴容観という人物がいたことは注目に値する。

この辞書には「縦」「横」について次のような説明がされている。

p199 たて縦

날（織物の）たて糸 기장　縦の長さ 길이長さ

p200 たてよこ　縦横　経緯

종횡縦横 경위経緯 장광長広

p184 よこ　横

곁ぞば 옆側 광広さ又幅

p185　よこもじ　横文字

양서洋書[11] 서양글자　西洋文字

この辞書で注目すべきは、まず「たて糸」「よこ糸」の意味と「長さ」を意味する語として記述されており、「方位」を表す語としては捉えられてはいないということ。次に、「よこ」だけに「横文字」という語が用意され、さらにそれを「西洋文字」とも言っていること。そして、④の『漢英対照；いろは辞典』を併せて見てみると面白いことがわかる。

西洋式の横書き方式が導入された当初は、「横字」「横文」の他に「洋書」「欧文」「西洋文字」などの語が当てられていたことがわかるのである。一方、伝統的な縦書き方式を表す語がまだ生じていなかったのではないかということが推測できるのである。

⑥『韓英字典』(1911)

この辞書は1911年にJames.S.GALEによって編纂されたものである。

まず、Foreword（序文）を見ると、初版本（1897年横浜で出版された）比べて、語の配列が朝鮮語式になったこと、さらに新しい単語がかなり追加されたことがわかる。

---

[11] ここでは「양서」洋書という語が「横文字」の意味で使用されている。現在その意味で使うことはないと思われるが、『표준』には、1.西洋の書籍 2.西洋文字の二つの意味が載っている。ちなみに、『연세』には양서という語は「良書」の意味でしか載っていない。

それでは、「たて・よこ」に関してこの辞書ではどのように記述されているか見てみよう。

가로横　horizontally;　on the side

세로　from top to bottom;　downwards;　on the perpendicular

종선 縦線　vertical or perpendicular lines

종횡-하다 縦横　to be lengthwise and crosswise;
to go here and there

この説明を見てわかることは、まず、가로に対しては「横」の漢字が付けられているのに対して　세로のほうには、「縦線」という語を載せているにもかかわらず、「縦」という漢字が付けられていないこと。また、「水平方向に」「垂直方向に」といずれも副詞の意味になっていて、名詞としては捉えられていなかったのでないかということである。

ただ、③『日韓いろは辞典』の「よこ」の項の説明に　곁쪼　옆側 が加えられているが、これはあくまでも日本語の「横」という語の説明であるから納得がいくが、④の辞書の가로の項に英語の on the side と説明が付けられているのがよくわからない。『英和辞典』を引くと、on the side には、慣用句として「副業として、ひそかに、内緒で」などの意味が載っているが、ここでは　On the left side,　on the right side などで使用される「側」という意味だと思われる。ひょっとして、朝鮮語の 가로が「側」という意味で使用されることがあったということであろうか。

また、字音についていえば、「縦線」があるのに「横線」は載っていない。

そして、「縦横」については、하다のついた用言の形で載っているが、意味を見ると、形容詞の意味と動詞の意味とが付けられていることがわかる。

現代語では主に 종횡으로「縦横に」という形で使われるのが普通で動詞として使われることはないようである。

⑦『朝鮮語辞典』(1920) 朝鮮総督府編

가로 横に

가로지나 세로지나（句）横にか縦にか（成否未定の意）

세로　縦に

종　縦

종횡縦横　縦と横

횡 横　횡서横書　文字を横方に書き行くこと：誤り書くこと[12]

1.2

中国語は勿論、日本語・朝鮮語ともに上から下に向かって垂直方向に書き進むのが伝統的な方式であった。「縦書き方式」で書き進めるのが一般的であったときには、その書き方を表す語がなかったはずであるし、西洋式の水平方向に書き進める「横書き方式」が新たに導入され、それを自国語の表記に適用させようとした際には、当然それを表す語が必要になり、最初は「横書」「洋書」「西洋文字」などの語が使われたらしいことは上の辞書の記述を比べてみれば推測できる。「横書き」という言葉が作られた後、伝統的な縦方向に書き進める方式を振り返ってみて、「横書き」という語に対して「縦書き」という語が生じたのではないかと思われる。それは丁度鈴木孝夫氏の言う「再起型」の命名に当たると言えよう。[13]

日本語の場合は、もともと「たて・よこ」という言葉があったので、比較的容易に「縦書き」「横書き」という語が生じたわけである。

1.3

次に、朝鮮における「タテガキ」「ヨコガキ」の歴史について見ることにしよう。

ネット上に「한글 가로쓰기 서양인이 최초로 시작?」[정재환의 한글 팩트체크]한글 가로쓰기 역사　という記事が載っていて、参考になるのでまずはこれを紹介することにしよう。

この記事によると、朝鮮に初めて横文字が紹介されたのは宣教師による布教が契機になったとしている。1880 年に出た『韓仏字典』はフランス宣教師の編纂した辞書だが確かにフランス語・朝鮮語ともに横書きになっている。しかし、その後出た한글で書かれた聖書 예수셩교젼셔(1887),누가복음졋셔(1890),요한복음젼셔(1891)はいずれも縦書きになっている。

---

[12] 「横」の項目に、「縦横」と並んで「横断」という語も載っているが、面白いことに「横に切断すること」という意味だけ載っていて、「横切って渡る」という意味が載っていない。現代日本語では、「切断」という意味で使うのは「横断面」という時だけではなかろうか。
いずれにしても、④⑤の辞書に副詞形とは言え、세로という形が載っていることは注目に値すると思われる。

[13]鈴木孝夫(1976)p12 参照

そして、朝鮮人の手によって初めて横書きで書かれたものは国漢対訳辞典であ

『国漢会語』(1895) だとして、その序文の一部を紹介している。

「자행 (字行) 은 종좌달우 (従左達右) 하며 간차 (簡次) 는 자하찰상 (自下撤上) 하야 외국책규 (外国冊規) 를 방 (倣) 하고--」

ここで重要なことは、「横書き」について言及しているのにそれを「従左達右」と漢語で説明しており、「横書」「가로쓰기」などの語は使われていないことである。

実は、「独立新聞」(1896),崔南善「少年」(総合雑誌)、金東仁(1925)「小説감자」なども縦書きで書かれていたとしている。

これだけを見ても、当時「横書き」で書かれたものは外国人の編纂した辞書ぐらいのもので、他は伝統的な「縦書き」で書かれていたことがわかると同時に、それらを表す朝鮮語がまだ用意されていなかったこともわかるのである。

ちなみに、「独立新聞」が縦書きになっていることに対して周時経氏が「独立新聞」の紙上でハングルは横書きにすべきだと主張していることも書かれている。

興味深いことに、このように「横書き」を主張する者がいる一方で、伝統的な「縦書き」を守ろうとする守旧派の者たちの勢力がかなり強かったこともわかるのである。このことは雑誌『한글』の編集の仕方を見るとよくわかる。

雑誌『한글』は 1927 年 2 月に創刊号が出され、1928 年 10 月まで続いたが、その後しばらく中断し、1932 年 5 月から新たに創刊号が出され、新しく出発をし直すことになる。

今、雑誌『한글』の編集の仕方を見ていくと、大雑把に言って、まず「右開き・縦書き・句点 (。)」から出発し、次に「右開き・横書き・句点 (。)」そして「右開き・縦書き・句点 (。)」へと逆戻りして、最終的に現在のように「左開き・横書き・句点 (.)」へと変わっていったと言える。

「縦書き」から「横書き」に移行した後に、また「縦書き」に逆戻りしたのは、伝統的は方式を守ろうとする守旧派の抵抗が強かったからではないかと思われる。

また、一時「横書き」の方式が取られた段階では、句点が依然として日本式の「。」で書かれていたことがわかる。

1.4

朝鮮語の「縦書き」「横書き」の変遷についてさらに見ていくことにしよう。

上で見たように、19 世紀末に出た『韓仏字典』で「横書き」方式が取られることはあったが、それを表す固有の朝鮮語が用意されていなかった可能性が高いということがわかった。

そのことは、上述の『日韓いろは辞典』の記述を見ても予想できることである。つまり、編者の柿原治郎という人物は朝鮮語の通訳を務めたこともあり、校閲者の朴容観氏も通訳を務めていたほどの人物であるから、もし辞書編纂の際に「가로글씨」や「가로쓰기」などの語、また「横書」という字音語がすでに存在していたとすれば、間違いなく辞書に載せていたはずだと考えられるからである。つまり、編纂時にはそれらの語はまだ存在していなかったか、仮に存在していたとしてもまだあまり一般に使われていなかった可能性が高かったと思われるのである。一方、19 世紀末日本に留学した朝鮮の知識人たちは、日本において西洋式の「横文字」「横書」「洋書」[14]「西洋文字」などという語に触れていたはずだし、朝鮮語にもこの方式を導入したいと考えていた人たちは少なくなかったのではないだろうか。

ちなみに、『デジタルコレクション』の公開資料である「官立諸学校入学試験問題(1902~1911)」をみると興味深いことがわかる。明治 35 年から明治 41 年までの試験問題には「答案ハ縦書ニスベシ」「答案ハ横書ニスベシ」「縦書横書随意ニスベシ」などの注意書きが書かれていたことがわかる。なぜ明治 35 年から明治 41 年まで付けられていたこれらの注意書きが明治 42 年以降付けられなくなったのかはよくわからないが、この当時留学生として入学試験を受けた者は「横書」「縦書」という語に触れていたはずだし、おそらくはその際は字音語として読んでいたのではないかと思われる。

1.5

以下に、雑誌『한글』に現れる「縦書」「横書」という字音語と「세로쓰기」「내리쓰기」「가로쓰기」などの固有語の現れ方を見ることにしよう。

① 「한글 1」第 1 巻第 1 号（創刊号） 「우리한글의 世界文字上地位」崔鉉培

p56 우리한글은 방금 세로글씨(縦書)의 옳은쪽에서 왼쪽으로 써가는것이다.

한글은 가로글씨（横書）로 変化할 性能을 亦具하였다

日文縦書와는 다른　優越한 点이다

---

[14] 『표준』の 양서「洋書」という語には二つ目の意味として서양글씨「西洋文字」という訳が付けられている。

우리글의 가로쓰기를 主唱하고

② 『한글 1』第 1 巻第 3 号「綴字特集」「各国의　文字運動　日本国字運動의 一瞥」　李熙昇

p276　横列書法（가로쓰기）을　採用하기를　主張한　것을　当時에　있어서, 매우斬新한 考案이라 하야

p277 漢文을 섞지 않고 縦書하려한 것이오 木村鷹太郎氏는 横書片仮名을 案出하였으니 片仮名을 横書筆写에 便利하기 為하야[15]

p278　中村春二氏가　平仮名縦書를　主張하야　高尾謙一氏가　片仮名横書로 主張하야

③ 第 1 巻第 4 号　「이름씨（名詞）의　細説（上）」崔鉉培

P345 가로글씨（横書）、 내리글씨（縦書）

④ 第 5 巻第 2 号　「가로글씨의 理論과　実際(1)」　崔鉉培

P358 내리줄（縦行）、 가로줄（横行）

내리글씨（縦書）、 가로 씨거나（横書하거나）

P359　가로글씨（横書）

가로씨는（横書하는）것이 세로씨는（縦書하는）것보다 훨씬 하다[16]

P363 내리글씨로 된 文字

「한글 가로쓰기의 史的観察」　　金允経

p364 가로쓰기의 歴史

가로쓰기에 대한　案

오른쪽에 니리글씨（縦書式）를　対照함

---

[15] 「横書」「縦書」などの語が、果して日本語式に発音されていたのか朝鮮式字音で発音されていたかが気になるところだが、わかる場合があるのである。

つまり、「横書片仮名」という語がもし日本語式に「よこがきかたかな」と読まれていたとすれば、助詞は를となるはずであるが、을となっていることから少なくとも「片仮名」は편가명と朝鮮式字音で読まれていたことがわかり、「横書」のほうも同様「횡서」と字音で読まれていたことがわかるのである。

ちなみに、1980 年代まで、日本の地名や日本人の名前までもが字音読みにされていたのである。留学時代に、日本に「삼도유기부」という作家がいるだろうと聞かれて、最初のうちは誰のことかわからなかったが、話しているうちに「三島由紀夫」のことだということがわかったということがあった。

[16] この論文では쓰다（書く）の意味で、しばしば씨다という形が現れるという特徴がある。

P365 오른쪽으로 가로 쓰고
　세로 쓸 때에는 이를 다 내리씀
P367 왼쪽에서 오른쪽으로 가로 쓰므로[17]

ここにあげた雑誌『한글』の例は 1934 年までのものであるが、「横書」を表す語は가로쓰기に固定していたわけではなく依然として「횡서」という字音で読まれていたことがわかるのである。一方、「縦書」に関しては내리글씨,내리쓰기という語が使用されていたことがわかるのである。『한글 1』にある崔鉉培氏の論文に세로글씨という語は出てはくるが、一例だけで他は내리글씨という語が使われていることから見て、세로글씨,세로쓰기などの語はまだ一般化していなかったのではないかと思われるのである。

以上のことから考えて、「横書き」「縦書き」を表す語がまず、「횡서」「종서」という字音語として取り入れられ、後にそれが「내리쓰기」「가로쓰기」という固有の朝鮮語に置き換えられるようになった。つまり翻訳借用することになったのだと思われる。さらに、내리が 세로に置き換えられることになるが、세로쓰기「縦書き」,가로쓰기「横書き」という語が揃うことによって、가로,세로が「方位」の意味を持つようになったのではないかと考えられるのである。

1.6

とすれば、「タテ」に対して기리,내리という形からどのような過程を経て세로という形が生じたのかという疑問が生じるが、それに対しては、門脇(2009)では、次のような説明を加えた。

「タテ」を表す세로という形と「ヨコ」を表す가로とを比較してみると、いずれも二音節語で、しかも「로」で終わるという特徴を有していることがわかる。세로という語は、「立てる」という意味の朝鮮語の세우다の先頭音세と로とを結合させて新たに作り出した造語なのではないかという仮説を立てたのであった。

このことを実証的に証明するのはかなり難しいことだと思われるが、一応ここでは一つの仮説として提出しておきたい。

(D)「～的の」に対する「～的인」の形

---

[17]가로, 세로が副詞として使用されている例である。ちなみに、『표준』では、가로-쓰다, 가로쓰기-하다, 회서（横書）-하다いずれも載せているが、『연세』では、가로쓰기は載せているが、 가로쓰다 가로쓰기-하다, 횡서-하다は載っていない。ここではこれ以上触れないが、派生関係を見るうえで検討する必要がありそうだ。

1. この「～的」は、「経済的な、組織的な」などの「的」であり、現代日本語では、連体形が「～的な」、連用形（副詞形）が「～的に」、終止形が「～的である」となるのに対して、現代朝鮮語では、連体形が「～的인」、連用形（副詞形）が「～的으로」、終止形が 「～的이다」と名詞的に語形変化するものである。

門脇(2004)では、これに関しては、簡単に「日本語を通して入ったものと考えられるもの」「日本語も昭和初期ぐらいまでの文献には「～的の」という形で名を修飾する例が現れ、この形のほうが古いのはないかと思われる。だとすれば、日本語の「的」の名詞的用法が韓国へ借用されたのちに、日本語のほうで形容動詞型の「な」のほうに変化したということになる。と述べただけであったが、以下に少し詳しく説明を加えることにしよう。

2. 先行研究

2.1

(a)大槻文彦(1902) 「文字の誤用」『復軒雑纂』

(b)山田巌(1961)「発生期における的ということば」『言語生活』120 号

(c)陳誼(1999)「日中両言語における「—的」について」『国語語彙史の研究 18』

(a)の「文字の誤用」は、明治３４年７月に東京市教育会で講演したものを文章にしたものである。この中には、「的」という語が使われるようになったエピソードが書かれており、「～的」について書いた論文でこのエピソードを引用しないものはないのではないかと思われる。このエピソードで興味深いのは、system 組織という語の形容詞形 systematic に対して、-tic と音が類似している「的」を当てたということである。翻訳者仲間での話し合いの中で出たアイデイアに対して「それは妙である。やってみよう」と皆納得したということであるから、その後の翻訳の作業に反映されたかどうか調べてみる必要がありそうだが、それは今後の課題として残すことにしよう。[18]

(b)の論文で参考になる個所は次の点である。

> 「的」は、「当時（明治 10 年前後）の学者階層に用いられたもので、人文科学に属する翻訳者あるいは論文だけでなく、自然科学のものにも使用されていること」、「俗文体、談話体で書かれた小新聞ではほと

[18]話し合いに参加した人たちの名前が５人あがっているが、その他とも書いているから、もう数名の参加者がいたのだと思われる。

んど用いられていない」「連体修飾語として「的」が直接下の漢語に続く以外はおおむね助詞「ノ」を介して続く」こと。

さらに、論文を書く際に利用した当時の貴重な資料を、例文をあげつつ紹介していることである。

その資料を含めて『デジタルコレクション』で閲覧できるものを調べてみると、「～的ノ＋漢語」の形がいかに多く現れているかがわかるのである。[19]

参考までに、この論文に紹介されている「～的ノ＋漢語」の例をあげておくと、「健康的ノ情感」「快楽的ノ事」「必要的ノ事」「学問的ノ道義」など。

ちなみに、「的」の使用としては最も古いとも言われるものとして西周の「政略論」の例があげられるが、「観察的ト、実行的トノ」「外物的ノ」などいずれも名詞として使用されていることがわかる。

(c) では、中国語における「－的」の逆輸入として次のような記述がある。

「19 世紀の末、日本の明治維新の成功に刺激され、中国の愛国者たちは西洋の技術、学術の受容を喫緊の課題と認識し、西洋文化をとりいれることを主張した。日本で明治 20 年代半ばになると、学術用語がほぼ整備されたため、日本の翻訳書や学術書が大量に中国語に翻訳されるようになった。」として中国語に取り入れられた「～的＋漢語」の例をあげている。

この時期は朝鮮からの留学生も増えてきた時で、日本語の学習を通して「～的の＋漢語」の形に触れていたのではないかと思われる。

それでは、朝鮮においてはこの「的」がどのように取り入れられていたかについて、雑誌『한글』を中心に考えてみよう。

2.2

『한글 1』の第 1 巻、第 3 号が、「綴字特輯」という特集を組んでおり、そこに「한글 적기의 바뀜 —朝鮮文表記法の変遷—」（金允経）という論文が載っている。

その第四章、第五章に「総督府の綴字規定」「総督府の新綴字規定」に関する詳しい説明が載っている。

第四章では、明治 44 年 7 月 28 日から同年 11 月までに 5 回にわたって会合がもたれ、1912 年 4 月にその結果が朝鮮語で発表されたことになっている。委員

---

[19] 「国会図書館デジタルコレクション」で公開されている関連資料の中には、著作権等の関係で利用できないものがまだかなり多い。

会のメンバーの中には、高橋亨、兪吉濬氏の名前が見える。しかし、その綴字法が相応しくないということで、新たな綴字法が制定されることになる。第五章では、1928 年 9 月に原案を作成し、それを民間の権威ある学者たちに討議をしてもらい、1930 年新綴字法を日本語で発表したことになっている。なお、メンバーの中には、小倉進平、崔鉉培氏の名前が見える。

さて、p298 にある[解説]の部分に、次のような記述があるのが注目される。「-----決して普通的の現象に非ず-----」さらに、p302 にも、「-----の如く普通的のものとしては如何と説く者あれど-----」「-----の如く普通的のものとしては如何と説く者あれば----」などと「～的な」ではなく「～的の」となっているものが 3 か所もあることがわかる。他に「的」が現れるのは、「文法的意識、表音的表記法」などのように「的」の後に直接漢語が接続し複合語になっているもの、さらに、「歴史的に、表音的に」などのように副詞として働くものが現れているが、この綴字法規定は「朝鮮語読本に採用すべく、各学校を通じて之を同一ならしむること」となっていることから、特に教育関係者の間ではかなり広く多くの人に読まれたものと考えられる。

ところで、雑誌『한글』を調べてみると、「～的의」と「～的인」の二つの形が現れていることがわかる。

① 「～的의」
『한글』 1 「우리 한글의 世界文字上の地位」崔鉉培
P55　뜻글（意義文字）　支那、埃及의　象形文字의　原始的의 것
『한글』2「토씨（助詞）의 品詞的単位性에 対하야」崔鉉培
　p608 다만 抽象的의것으로 되고
『한글』1「피히테의 言語観（上）」金善琪
P211　말은 超感覚的의것을　一種의　感覚的劃図에　依하야　表現하고
P211 一般的으로 말하면,超感覚的의것을,感覚的劃図에　依하야　表現함은
『한글』 1　「피히테의 言語観（下）」金善琪
p256 또한 感覚的의 것이어서

② 「～的인」
『한글』1 우리나라말소리와 다른 나라말소리와의 比較」崔鉉培
p152 元来가 妥協的인 文字를 가지고
『한글』1「言語와　人間」柳根錫
p250 乙은 世俗的인 사람이요,

『한글』1　「피히테의 言語観（下）」金善琪
p256　다시 必然的인 것이 된다
『한글』1　「綴字法의　理論과　実際（上）」李鈑
p417　　가장 理想的인 글은
p421 이것은 가장 原始的인 発達되지 못한　初歩的綴法이다
p422 가장 進歩된 合理的인 綴字法을 이름이다

①だけ見ていると、「～的의」は것　のような漢字語でない場合に現れているようにも見えるが、②を見ると、것が続いているにも拘わらず「～的인」の形が用いられていることがわかる。また、崔鉉培氏に関しては、「～的의」「～的인」の両方の形が見られ、ゆれを見せていることもわかる。

こうして見てくると、「的」が、現在両言語において、「そのような性質・傾向を持つことを表す」接尾辞として使用されているが、朝鮮語では名詞的に活用するのに対して、日本語のほうがいわゆるナ形容詞として活用するようになったかの理由が推測できるのではないだろうか。まず、この「的」という形式がもともとは中国語起源だとしても、現代語で使用されている用法は日本で生まれたものである。

日本語においては、初めの段階では、「～的に」「～的だ」「～的の」という具合に名詞としての語形変化をしており、この段階で朝鮮語との接触が起こり、そのまま名詞として取り入れられることになった。日本語においては、連体形の形が「～的の」から「～的な」へと変化したのに対して、朝鮮語のほうは、「～的으로」「～的이다」「～的인」のように名詞として語形変化するようになった。

上述した雑誌『한글』に現れた連体形のゆれの形である「～的의」は日本語の「～的の」の影響を受けたものではないかと思われる。

2.3

実は、この『西遊見聞』には「一字漢字＋的」の形に하다が付く例がいくつか見えるのであげておくことにする。

P85　真的한 形態
P87 確的한 正理
P91 明的한 条理
P117 明的한 分度

これまで上の 4 例しか見つかっていないが、あるいは中国語の古い用法であろうか。なお『朝鮮語辞典』（総督府）には「真的진덕」「確的확덕」の 2 つだ

けが載っており、それぞれ「的実덕실に同じ」「確実확실に同じ」と出ている。そして、「的実」のほうは、「明確なこと（的確、真的）」とある。一方、『韓英字典』のほうには、「真的」だけが「真的하다」として 載っており、「to be true; to be genuine; to be sure」という訳が付けられている。面白いことに「真的」には진짜という形でも載っており、「what is real;　genuine quality;　a sincere person」という訳が付いている。対語として가짜という語が載っていることから、「本物」という意味で使われていたということがわかる。

ところで、『西遊見聞』p133 に「究竟하는 準的을 細繹한則」という文が見え、「準的」という語が出てくる。この語は陳誼（1999）p338 によれば、『正法眼蔵』にあるのだという。『朝鮮語辞典』にはこの語が載っており「標準」という訳が付けられている。

今のところ『西遊見聞』（第 I 巻）しか見ていないので、この「的」の用法が他の巻にも出ているか調査してみなければならない。日本に滞在中に日本語式の「的」の用法に触れることはなかったのだろうか。

2.4

日本語において、「～的の」という形がいつごろまで使われていたかについて、いろいろと調べてみたが、ざっと見ただけでも昭和初期は勿論のこと、終戦直後までも使用されていたようなのである。

簡単に例だけあげておくことにしょう。

橋本進吉(1935)では、ｐ1 の「機械的な暗記になり易い」という文以外は例外なく「～的の」となっている。

実用的の必要：科学的の態度：比較的の研究：一般的のことば：具体的のものなど

また、橋本進吉『国語学概説』(1970)＜初版は 1946 年＞p7 にも「又言語は社会的のものであって、社会生活の中から生れ、社会生活に便ずる為に用いられるものである。又言語は歴史的のもので前代から後代へと伝わって行くものである」という文がある。

7. 結論

まず、本論の前半ではいくつかの論文を取り上げて、日本語と朝鮮語とが相互にいかなる影響を受けてきたかについて併合時代以降に限って「言語接触」という観点から整理してみた。そこでは、併合時代における借用は Bloomfield の言う「密接的借用」に当たり、その借用は語彙（実質語）が主流となっていたが、若干ではあるが、接尾語のような文法的な要素もあり、翻訳借用も含め、

俗語など数多くの日本語が流入したと考えられる。一方、併合時代以降はほぼBloomfieldの言う「文化的借用」に当たると見られ、この時期にも、あらゆる品詞にわたり、ピジン的な表現も含めて、いろいろな形で日本語からの影響を受けたことがわかった。その結果を借用の強度から見ると、類型的な大きな変化を引き起こすようなことは見られないことから強度は３程度ではないかと評価した。

さて、後半の本論で追加した４つの要素に関して考察した結果をまとめると以下のようになろう。

① 朝鮮語の中に、日本語式の連結辞を介する数量名詞句が新しい型として追加されたこと。言い換えれば、統語的な構造に関する影響を受けたこと。

② 「～てもらう」「～ていただく」という表現ができなかった、体系上の「空き間」になっていた個所を埋めることによって新しい型を獲得したこと。これは、ホケットの言う「必要による補充」として説明できるのはないかということ。また、この表現がブルームフィールドの言う「方言的借用」によって全国に広く伝播している可能性があるということ。

③ 西洋式の「横書き」が日本を通して導入され、同時にそれを表す言葉が「横書（횡서）という字音語として取り入れられた。そして、それと対をなす「縦書き」に対しても、「縦書(종서)」という字音語として取り入れられることになる。その後それらに対して固有の朝鮮語に翻訳して가로글씨,가로쓰기,내리글씨,내리쓰기という語が当てられる。さらに、내리が세로に置き換えられることになるが、세로쓰기「縦書き」,가로쓰기「横書き」という語が揃うことによって、가로,세로が「方位」というカテゴリーに組み入れられることになったのではないかと考えられること。

④ 現在両言語において、「そのような性質・傾向を持つことを表す」接尾辞として使用されている「的」という接尾語は、もともとは中国語起源だが、現代語で使用されている用法は日本で生じたものである。

朝鮮語で語形変化が名詞と同様に変化するのに対して、日本語では語形変化がナ形容詞として変化する。両言語において名詞を修飾する連体形に違いが見られるのは、日本語のほうが「～的の」から「～的な」へと変化したためではないかと思われること。

さて、追加して考察した４つの項目が認められたとして、借用の強度はどうなるであろうか。

接尾辞という文法的な要素の借用、体系上の「空き間」への必要による補充、また가로,세로が「方位」のカテゴリーに組み込まれたことなど、広く文法にも深く係わっていることから、一応強度４と考えておきたい。

ただ、どれぐらい強い影響を受けたら強度があがることになるかという評価の仕方にはなかなか難しい点がある。前述の接触の強度について、強度５と強度４の違いは、類型的に大きな変化を被るかどうかが基準となっている。日本語と朝鮮語のように、類型的に類似している言語間で接触があった場合、どれほど接触の強度が強いと言っても、膠着型から屈折型に変化したり、語順がSOVの型からSVOの型に変化したり、修飾語＋被修飾語の型から被修飾語＋修飾語の型に変化するということは考えにくい。とすれば、初めから強度５は考えにくいということになるわけである。つまり、大きな共通した枠組みのなかでの変化としてしか扱えないことになる。また、強度４と強度３の違いに対してもまだよくわからない点がある。

一応ここでは強度４と考えたが、まだ何か不足している感じがしなくもない。今後例えば｛複合助詞「～において」에 있어서に対する「～における」에 있어서의（直訳すれば、～においての） の形｝｛「～しなければならない」に対する翻訳調の強い　～지 않으면 안 되다｝などが日本語の影響によるものだということがわかれば、強度４の確実性が高くなるのではないかと思う。

参考文献

＜影印本＞

『翻訳老乞大　巻上』中央大学校大学院

『翻訳老乞大　巻下』仁荷大学校附設　人文科学研究所

L.Bloomfield(1933) “Language”

三宅鴻・日野資純訳(1965)『言語』大修館書店

C.F.Hockett(1966)”ACourse in Modern Linguistics” 第 11 版

Thomason and Kaufman(1988) “Language Contact, Creolization, and　Genetic Linguistics”

D.Winford (2003) “An Introduction to Contact Linguistics”

山田巌(1961)「発生期における的ということば　『言語生活』120 号

兪吉濬(1971)『西遊見聞』『兪吉濬全書 I』（原本は 1895 年刊行）

鈴木孝夫(1976)「語彙の構造」『日本語の語彙と表現』日本語講座第４巻

李基文(1979)『国語史概説』改訂版

李基文(1980)「19 世紀末葉의 国語에 対하여」『南広祐博士　華甲記念論叢』

李漢燮(1984)「現代韓国語に入っている日本語—日本で一部または全部が訓読読みされる語を中心に - 」『語文』第 44 輯大阪大学目文学研究室編輯

李漢燮(1986)「韓国語に入った日本語」『国語語彙史の研究 6』国語語彙史研究会
熊谷明泰(1987)「朝鮮語における借用語の研究方法—日本語からの原音借用語に関する調査に基づく考察」『日本文化研究』第 3 号：韓国外国語大学校日本文化研究会
熊谷明泰(1990)「韓国の言語醇化資料と日本語系借用語」『日本文化研究』 4、韓国外国語大学校日本文化研究会
熊谷明泰(1991)「朝鮮語に転移使用された日本語詞—解放前朝鮮語出版物の語彙調査 - 」『韓国外国語大学論文集』23、韓国外国語大学校出版部
門脇誠一(1991)「朝鮮語の数詞句構造における属格助詞의について」『北海道東海大学紀要人文社会科学系第 4 号』
門脇誠一(1992)「朝鮮語・日本語と周辺の言語における名詞修飾構造：類別数詞との関係をめぐって」『北の言語：類型と歴史』
門脇誠一(1994)「日・韓語対照研究－授受動詞の補助動詞的用法を中心に－」『北海道大学留学生ｾﾝﾀｰ年報第 2 号』北海道大学留学生ｾﾝﾀｰ
李漢燮(1998)「朴泳孝の建白書に現れる日本漢語について」『国語語彙史の研究 17』国語語彙史研究会編
陳誼(1999)「日中両国語における「－的」について」『国語語彙史の研究』18
屋名池誠(2003)『横書き登場　-日本語表記の近代-』岩波新書
門脇誠一(2004)「日本語と韓国語は「言語連合？」をなすか」 月刊『言語』9 月号
門脇誠一(2007)「日本語研究の方向—対照研究から類型論的研究への発展—」『東アジアの日本語研究』国際ワークショップ
門脇誠一(2009)「朝鮮語の方位を表す名詞가로「横」 세로「縦」に関する通時的考察」『朝鮮語史研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
金曙泳(2011)「－的」の日本語化」『日本語學研究 第 30 輯』

国立国会図書館デジタルコレクション
福澤諭吉(1868) 「世界国尽」巻 1 亜細亜州
村田文夫(1869) 『西洋見聞録』巻之上　前編
村田文夫(1869) 『西洋聞見録』巻之上　前編
平文編訳(1872) 『和英語林集成』
高橋五郎(1888)『漢英対照；いろは辞典』
大槻文彦(1902)「文字の誤用」『復軒雑纂』
官立諸学校入学試験問題(1902~1911)
橋本進吉(1935)「文法論」信濃木崎夏季大学
橋本進吉(1970)『国語学概説』＜初版は 1946 年＞
＜辞書＞
『국어대사전』　이희승편(1976)

『동아 새국어사전』　李基文監修(1989)
『동아 프라임 韓英辞典』(1990)
『言語学大辞典』第6巻　述語編(1996)
『국립국어원 표준국어대사전』(1999)
『연세 현대 한국어사전 』(2006)
『훈민정음 국어사전』 (2009)
『デイリーコンサイス　韓日・日韓辞典』(2010) 三省堂
『小学館　韓日辞典』(2018)